

日本の一流競技者のスポーツ観構造について

——日本人のスポーツ観分析のための一試論——

丸 山 富 雄

はじめに

これまで、日本人のスポーツ観についてはかなりの論議がなされている。それらの多くは、後に考察されるように、日本の風土や歴史・文化・社会構造を背景とした日本人の精神構造や価値体系から「日本人のスポーツ観」を一般化し説明したものである。しかし、スポーツ観は、たとえば人生観や恋愛観などと同様、日本人としてその歴史的文化的脈絡から生ずる一般的傾向を指摘しうるとしても、個人間におけるその相違も明らかである。そして、この個別性を重視した「スポーツ観」の研究やこの個別性を生み出す背景、つまり、個人的なスポーツ観形成過程における諸要因の構造連関を考察した研究は皆無といってよいだろう。

日本人のスポーツ観が諸外国（特に西欧諸国）と比較し、そこに特殊性がみられるとすればする程、竹之下⁽¹⁾が指摘するように、「どのようなスポーツ観を育てるかは体育の重要な問題」であり、「日本のスポーツが当面している基本的な問題」として、スポーツ観研究が位置づけられるのである。

本研究は、このような重要な課題として位置づけられる「スポーツ観」研究の予備的作業として、序説的な位置をしめるものである。すなわち、現代日本というある特定の歴史的社会的局面における人々——一方で共通の文化的背景を持ちながら、他方、性格や運動能力、生育環境やスポーツへの社会化過程などに個人的な相違を持つ人々——のトータルなスポーツ観研究のための試論である。そこで本研究では、スポーツ観研究の方法論的検討と、対象を一流競技者に限定し、彼らのスポーツ観の特徴、および、

そこからスポーツ観分析の方法を検証することを目的としている。

I スポーツ観研究の方法論的検討

1. スポーツ観とその性格

「スポーツ観」とは、人々のスポーツに対する様々な認知的側面、つまり、意見や態度、信念、価値観などを包括し総称する概念として使用される。つまり、個々のスポーツに対する意見や態度、信念等は一定の価値基準や関連性の中で整序され体系化されており、そのような信念体系がスポーツ観にはかならない。しかし、このような定義はホームズ⁽²⁾の指摘する「非操作的定義」であり、「スポーツ観」そのものについては何も語ってはいない。ホームズが「文化」の一般的な定義（非操作的定義）では何も説明できないと指摘するように、われわれも「スポーツ観」そのものの概念規定ではなく、「スポーツ観」に含まれる検証可能な変数から、スポーツ観を説明しなくてはならない。岸野⁽³⁾や菅原⁽⁴⁾ら多くのスポーツ学者が、たとえば、求道主義・勝利主義・精神主義⁽⁵⁾という特徴から日本人のスポーツ観を説明しているのは、「……主義」と一般化される何らかの変数に準拠しているのである。同様のことは「価値観」や「人生観」等の場合にも当てはまり、たとえば、村上⁽⁶⁾は産業社会の価値観群を、能動主義・手段的合理主義・個人主義で説明し、また、見田⁽⁷⁾は人生観を考察するにあたり、「生き甲斐」「成功観」「理想的人間像」という三変数から人生観を一般化している。スポーツ観は決して単一の信念体系や価値志向ではない。スポーツ観を構成し、それらを説明しうる変数としての

(1)

下位信念体系を抽出し、それらからスポーツ観を一般化する必要がある。

次に、スポーツ観は個人的なスポーツ観から、ある階級や階層・民族などの集団的スポーツ観まで様々なレベルで考えることが可能である。当然のことではあるが、これら様々なレベルのスポーツ観は相互に密接な関係を持っている。すなわち、集団的スポーツ観、たとえば「日本人のスポーツ観」として抽象化された特徴やイデオロギー的な「スポーツ信条」⁽⁸⁾は、多くの主体の持つ明示的・黙示的な個人的スポーツ観の総体として、あるいは、その中から抽出され最も代表性を持つ「支配的スポーツ観」として形成される。逆に、集団的スポーツ観は、その社会の支配的なスポーツ観として、文化の個人への内在化のメカニズムやスポーツへの社会化過程において、個人のスポーツ観形成に大きな影響を与えていると考えられる。パーソナリティ論の図式の適用しうるこの両者（個人と文化）の関係は、さらに次に述べるようなスポーツ観の持つ性格を明らかにするが、個人的スポーツ観、集団的スポーツ観の相違は、ほとんどの場合、スポーツ観研究のアプローチの違いに規定されていると言える。（次節で検討）

個人的スポーツ観と集団的スポーツ観の相互規定性という図式は、それを拡大すれば、スポーツ観がスポーツの認知的側面における「個人」と「社会」（文化）とを媒介する「戦略変数」として機能していると考えられる。そして、このモデルは、一方でスポーツ観の形成過程における個人的要因と文化・社会的要因の影響を示唆するものであり、他方、スポーツ観が個人の「欲求」と文化の「統合」という二面性を持つものであることを示唆している。前者に関しては、後に考察するように、スポーツ観形成における個人的要因と社会的要因とを統合する枠組として、「スポーツへの社会化」の分析枠組が有効であろう。

後者、すなわち、スポーツ観の二面性という性格に関しては、見田⁽⁹⁾が「価値意識」の概念の場合に指摘したことが「スポーツ観」の場合

にも当てはまるであろう。つまり、スポーツ観は人々のスポーツに対する駆動的な側面（「欲望」その他）と規制的な側面（「道徳」その他）とを包括したものと捉えられる。スポーツに対する駆動的側面としては、個人の「スポーツ欲求」、たとえば、プレイ欲求（コンサマトリーな価値追求）や勝利追求の欲求が考えられる。そしてこれらは「スポーツは活動それ自体に価値がある」とか「スポーツは勝たなくては意味がない」といったスポーツ観を構成する信念として表明される。また、規制的な側面、あるいは、道徳的・倫理的側面は、社会的機能という観点からみれば社会の統合とパターン維持に寄与するものであるが、「スポーツの効用」（道具的価値の黙示的・明示的強要）やアマチュアリズム（スポーツの道徳律）⁽¹⁰⁾の信奉の中に見い出すことができる。それらは「スポーツは健康の維持増進の有効な手段である」「スポーツは人間形成に役立つ」、あるいは、「アマ・スポーツは余暇にやるべきだ」「物質によってスポーツの動機づけをするのはおかしい」などの信念に具体化される。そして、元来スポーツは欲求から生じたものとされているが、日本の場合、この規制的側面が強調され、しばしば指摘されるように⁽¹¹⁾「……のために」スポーツを行なうというスポーツ観が支配的であった。

ここで引用したように、スポーツ観の「駆動的側面」と「規制的側面」はしばしば矛盾した内容を表わしている。競技者はこの両者の緊張と葛藤の中で、自己のスポーツ観を形成しスポーツを意味づけるのであるが、このミクロのレベルでの緊張や葛藤はほとんどの場合表面化しない。競技者、特に一流競技者の緊張や葛藤は、後の君原選手の事例のように、彼のスポーツ界で演ずる役割に付随した社会的期待や要求と自らのスポーツ観・価値観とのギャップや矛盾からである。「駆動的側面」と「規制的側面」の相対立する信念を包含する「スポーツ観」そのものは、葛藤することなく体系の中で統一されているのである。「勝って泣き、負けて泣く」高校野球に象徴されているように、どんなに勝利

を希求する選手であっても、「アマチュア精神にのっとり正々堂々と戦う」ことを是認し、そこに何の矛盾や異議も見い出さないのである。

H. Edwards は前述のよりマクロな社会的次元での緊張や葛藤の解決のために「スポーツイデオロギー」が機能していると指摘している⁽¹²⁾が、スポーツ観そのものに内在する葛藤を回避する心理的な合理化のメカニズムはどのように説明されるのであろうか。その説明の一つとして、スポーツ観にみられる「欲望」および「道徳」両側面の社会的承認ということがあげられるであろう。

スポーツ観における駆動的側面、つまり、スポーツ欲求は、スポーツを成立させる主体側の条件・出発点であるが、その欲求は内海⁽¹³⁾が指摘するように、「スポーツの定義」の中に組み込まれ、暗黙のうちにそれらは社会的に承認されているのである。今日、スポーツは中世イギリスのフットボールにみられたように禁止されることも、禁欲主義的価値観に対する罪悪感の中で行なわれることもほとんどない。また、スポーツの存在自体が、たとえば労働力や兵役のための体力づくりとして、強制されたものではない。スポーツはその語源の原義から、また、ホイジンガやカイヨワのプレイ論から、「自由な活動」として承認され、さらには、ジレ⁽¹⁴⁾に代表されるように「競争」を含むものとして承認されている。この「自由」や「競争」は人々がスポーツに要求し期待する人々の欲求（楽しみたい、勝ちたい）の具現化されたものである。これらが「スポーツの定義」の中にもり込まれることによって、潜在的にスポーツ欲求が社会に承認されることとなっているのである。

一方、スポーツ観の規制的側面は「スポーツの社会的機能」や「教育の目標」として正当化されている。たとえば、H. Edwards が指摘するように「アメリカの支配的スポーツ信条」は、その神話的性格を強く持ちながらも、社会（特に白人社会）の「道具的価値」と「パターン維持」に機能するものとして承認されている。⁽¹⁵⁾また、スポーツが体育の中に位置づけら

れる時、教育の目標として、スポーツ観の「欲望」の側面は軽視され、「道徳」の側面——道具的価値——が強調され、しかも公認されているのである。

このように、スポーツ観は「個人」と「社会」、それ故「駆動的側面」と「規制的側面」の二面性を持つが、それらは前者が「スポーツの定義」、後者が「スポーツの社会的役割」や「スポーツの教育的価値」として社会的に是認され正当化されている。個人にとって、しばしばどちらかの側面が優位となっているが、両者は社会的に承認されることによってスポーツ観から昇華し、その葛藤は合理的に回避されているのである。スポーツ観はこのような二面性を持ち、しかも、矛盾しあうものが矛盾せず統合されているというダブルパラドクスの性格を所有していると考えられる。

2. スポーツ観研究の方法

ここでは「スポーツ観」あるいは「日本人のスポーツ観」についての従来の研究をその方法論において整理し、若干の検討を行なう。

従来のスポーツ観研究は次の三つの研究方法に大別しうる。

(1) 日本人論的スポーツ観研究

第一のアプローチは、「日本人のスポーツ観」という標題で考察されている論文や評論の大部分の採用する方法である。この分析図式は、哲学者や文化人類学者・社会人類学者等が展開してきた日本人論・日本文化論の系譜の中で、日本人のスポーツ行動の特質（パターン）をとらえ、説明しようとする方法である。これらの研究は、日本の風土や歴史・社会構造およびそれらと密接に関係する日本文化の中にスポーツ観の源流を伺ね、より直接的には、日本人の精神構造・価値体系とスポーツ観を結びつけている。このアプローチをとる「日本人のスポーツ観」の考察は、戦後の日本人論の流行の中で、概説や論文を含め枚挙にいとまのない程数多く見い出される。その原因は日本のスポーツ情況

の特異性の中にいくつか存在する。たとえば、西欧スポーツ輸入以前の武道の存在とその存在意義、スポーツの日本における文化受容の歴史的経緯（和洋折衷的文化受容）、スポーツの活動基盤としての集団の日本的成立過程と集団構造などである。このような特異性を持つスポーツ状況の中で、いわゆる「しごき」や「勝利至上主義」などの現象とその精神的基盤に日本的特質が見い出され、問題とされてきたのである。

このようなアプローチから、たとえば岸野は「勝利主義」「自虐主義」「修養主義」「娯楽性・自発性の欠如」「排他主義」を、菅原は前述のように「求道主義」「勝利主義」「精神主義」を、木下⁽¹⁶⁾は「スポーツの実利主義的価値観」を、日本人のスポーツ観として特徴づけている。そして、それらを日本の「風土」（菅原）や、「タテ社会的性格」「日本社会の家族的構成」「武士道」（竹之下）、あるいはまた、「シャーマニズム」（浅田⁽¹⁷⁾・芳賀⁽¹⁸⁾）と関連させ説明している。また、高校野球にみられる勝利への異様な執着に日本人の精神構造を見、その宗教的儀礼との機能的等価性を指摘する作田⁽¹⁹⁾の研究もこのアプローチと言える。

ところで、この巨視的なアプローチは日本のスポーツ界にみられる特異な現象を説明するのに有効であり、そこから集団的スポーツ観を一般化しうる。しかし、現象の説明は論理の演繹的説明であり、高度に概説的・抽象的とならざるを得ない。従って、常態での人々のスポーツ観を分析できず、さらに、スポーツに対する個々の信念から帰納的にスポーツ観を分析するわけではないので、スポーツ観の構造やその個別性が無視されるという弱点がみられる。

（2）統計調査的スポーツ観研究

この方法は文化論的アプローチとは逆に、個人のスポーツに対する信念や価値志向を数量的に把握し、そこからその社会における一般的な（集団的）スポーツ観を構成しようとするものである。たとえば、近藤等⁽²⁰⁾の「スポーツ・モ

ラル」、末利⁽²¹⁾の「スポーツに対する態度」についての日本と外国との比較研究や、体協⁽²²⁾やスポーツ社会学国際調査委員会⁽²³⁾の行なった一流競技者についての調査などにみられる統計的アプローチがそうである。

この方法は一般の統計的社会調査の持つ利点と弱点を持つ。見田はこの種の数量的データの長所を「包括性・代表性・客観性・信頼性・精密性など」⁽²⁴⁾と指摘している。スポーツ観を分析する場合にも、そのサンプルの抽出によって包括性と代表性を満足させうるし、また、ある基準のもとに「標準化された」スポーツ観——後者3つの長所を満足——を入手することができる。たとえば、スポーツ社会学国際調査委員会による日本とカナダの一流選手の価値志向についての分析では、「ベストをつくすこと」「相手に勝つこと」「フェアにプレイすること」の三つの標準化されたカテゴリーに回答が求められる。そして、それらは得点化され、その結果、日本がカナダよりも「勝利志向」の強いこと、しかも、それはスポーツ種目や学歴によっても相違することが客観的に示されている。さらに、「上のデータからみるかぎり、小学生の時の勝利至上主義から、専門化した後ではベスト志向へと変化するようである」⁽²⁵⁾と指摘しうるように、調査の方法や分析によって、かなり詳細な結果を得ることができる。

しかし、このような統計的調査はほとんど「強制選択法」の質問紙によるもので、基準は明確ではあるが、必要な項目を完全に網羅するには限界がある。さらに、見田はこの「数量的データ」の欠陥を、(1)「意味的」な理解可能性の稀薄、(2)総合的、多次元的な把握の困難さ、(3)その起源や変革可能性に関する動的な把握の困難さ、⁽²⁶⁾と指摘している。つまり、この方法では、スポーツ観を構成する個々の項目では客観的なデータを得ることはできるが、そのデータの多次元的・ダイナミックな意味を把握することはできない。それ故、スポーツ観を構成する下位信念体系の関連性や、スポーツ観形成過程における諸要因の構造連関は把握しえないの

である。

(3) 質的データ分析によるスポーツ観研究

前述2つのアプローチの欠陥を補充し、生き生きとしたスポーツ観を把握する方法は、「質的」なデータを分析する方法であろう。スポーツに関する手記や自伝・論文などの「質的」なデータに立脚し、そこから個人的なスポーツ観を抽出する方法である。見田は前述の数量的データの抽象性と対比させ、「質的」なデータはこれとは逆に、諸次元のダイナミックな関係があるがままの姿で示し、生き生きとした具体性と「了解可能性」を保ちうる⁽¹⁷⁾ことを指摘している。

従来のスポーツ観分析においても、「質的」なデータから分析したものはかなり多い。たとえば、“Athletic Journal”から抽出した130の論文を中心に、その内容分析を行ない、「アメリカのスポーツ信条」を分析した前述の H. Edwards の研究。また、時代時代の社会情勢やスポーツ界の動向と関連させながら、戦後児童文学に表わされたスポーツやスポーツ観を分析した吉野等⁽²⁸⁾の研究。さらに、体育人や文化人のスポーツ観をその著作の中から分析・考察したいくつかの研究⁽²⁹⁾などはこの方法によるものである。著わされた「質的」なデータではないが、インタビューなどによる事例研究、たとえば、過去に逆上って現在の心理的社会的障害の原因を解明しようとする精神病理学的事例研究も、この方法論に含まれるであろう。スポーツ観の研究ではないが、そのような事例研究の好例は、A.Beisser の “The Madness in Sport”⁽³⁰⁾であろう。

ところで、この「質的」データ分析もそれ固有の弱点を持つ。それは前述の数量的データの利点に欠けることであり、見田は次のような2点を指摘している。⁽³¹⁾一つは「代表性」の問題で、母集団の代表的標本を、しかも、多量に入手することが困難なことから、普遍的な法則を導き出すことが難しいことである。もう一つは、数量的データ分析とは逆に、信頼性や客観

性・精密性がある程度犠牲にされざるをえないことである。そして、見田は「質的」データはまさに「質的」データとしての、「量的」データはまさに「量的」データとしての、それぞれに固有の持ち味ないし利点を最大限に活かせるような仕方の結合、いいかえれば多段式の分析⁽³²⁾を提唱している。

従来の質的データに基づくスポーツ観分析は、見田の提案する「多段式の分析」による補完はもとより、「質的」データ固有の利点やよさをも十分には活用してはいない。言いかえれば、Beisser の緻密な分析による障害の諸要因とその背景の記述以外は、研究者の研究目的やそのための方法論から、見田の指摘するような意味で「質的データ」を活用してはいないのである。たとえば、Edwards の場合には、スポーツ信条の社会的機能を考察することが目的であり、個々の信条のダイナミックな関係は関心事外であった。しかし、先に述べたように、スポーツ観の多次元的な構造分析やスポーツ観形成過程における諸要因の構造連関を考察する場合には、いくつかの固有の欠陥を持つとは言え、見田の「質的データ」の分析方法が有効であろう。さらに、質的データ分析の欠陥を補完し、スポーツ観を客観的に一般化するためには、「多段式の分析」——数量的データとの併用——が必要と思われる。

II 一流競技者のスポーツ観

1. 本調査の目的と方法

本調査では、日本の一流競技者のスポーツ観を質的・個別的に分析し、一流競技者のスポーツ観の全体的構造とそこにみられるいくつかの特徴を明らかにすること、さらに、何人かの個人的なスポーツ観形成過程を分析し、そこにいくつかのパターンを発見することを目的としている。しかし、本論文の予備的作業としての性質上、分析・考察の視点は主にモデルの構築とその検証におかれ、一流競技者のスポーツ観を一般化し結論づけることに主眼がおかれている

表-1 調査対象の一流競技者

	生 年	(※) 年 齢	親 の 職 業	兄 弟、家 族 構 成 等	経 済 状 態	家 庭 環 境 の 影 響	ス ポー ツ を 始 め た 年 齢・動 機 等
1. 古橋広之進 (水 泳)	S. 3	47	農 業	9人姉妹の長男	貧 困	父 きびしいシツケー負けじ魂	小さい頃から、中2から本格的に
2. 小野 喬 (体 操)	S. 6	44	教 員	3人姉妹の長男 大学2年 父 死 亡	父 の 死 後 苦 勞	母 自 己 に きびしい 性 格	大学1年、先輩のすすめ
3. 椎原 正三 (レスリング)	S. 4	46	木 工 所			父の自主独立の教育観	3才の頃から、父の指導
4. 落谷 千春 (アルペン)	S. 6	44				父の英才教育	高校から
5. 荻村伊智朗 (卓 球)	S. 7	43	事 務 員	3才の時父死亡 母1人、子1人	貧 困	母の反対→責任感と反抗心	小学校からアルバイト→負けじ魂
6. 三宅 義信 (ウエイトリフティング)	S. 14	36	農 業		貧 困	母の苦勞→発奮	高2、ラジオの実況がきっかけ
7. 池田 敬子 (体 操)	S. 8	42	村 長	小6年 父死亡		母の言葉→苦しい時の支え	物心ついた時から鉄棒、高校から、部員不足で
8. 神永 昭夫 (柔 道)	S. 11	39					高1、試合をみて刺激される
9. 山中 毅 (水 泳)	S. 14	37	漁 師	兄弟も多い	裕福ではなかった		物心ついた時から、高校から本格的に
10. 兵藤(前畑) 秀子 (水 泳)	T. 3	62		5人兄弟の2番目長女 17才の時父母死亡		母の言葉→苦しい時の支え	5・6才の頃から、川で泳ぐ
11. 加藤 沢男 (体 操)	S. 21	30	寺				中1から、ケアガリができ勧誘される
12. 竹宇治(田中) 聡子 (水 泳)	S. 17	34	精 米 所	小学生の頃 母死亡	食べる程度で貧乏		池で子どもの頃から、中学からなかなかに強力的に
13. 釜本 邦茂 (サッカー)	S. 19	32		5人兄弟の4番目			小4、外国へ行きたいから
14. 君原 健二 (マラソン)	S. 16	34	店	5人兄弟の3男	裕福ではなかった	小学校から店の配達→忍耐力	中2、なんとなく
15. 生井けい子 (バスケット)	S. 26	25				両親の理解	中2、母親の影響
16. 竹本 正男 (体 操)	T. 8	57		5男で末っ子			中2
17. 長久保(高見沢) 初枝 (スケート)	S. 10	41	サラリーマン	5人姉妹の長女		父の物心両面での援助	中1、父のすすめ
18. 加茂 公成 (テニス)	S. 7	45		4人姉兄の末っ子		父の英才教育	物心ついた時から、父の指導
19. 松崎キミ代 (卓 球)	S. 13	39	酒 屋	妹5人の長女			中1、試合をみて刺激される
20. 湯水 博恵 (バドミントン)	S. 23	28	サラリーマン	第2人の長女			中1、誘われてなんとなく
21. 猫田 勝敏 (バレーボール)	S. 19	33		4人兄弟の末っ子			小3、町ぐるみバレーの環境
22. 吉川 貴久 (ピストル)	S. 11	41		小3年 父死亡	思 ま れ ず	父きびしいシツケー仕事に対する義務感	警察学校、仕事のため
23. 鈴木 恵一 (スケート)	S. 17	36				両親の理解	中3、スケートの町
24. 遠藤 幸雄 (体 操)	S. 12	42		小4年 母死亡	貧 困	中・高校 施設から通う	中1、先生のすすめ
25. 長谷川信彦 (卓 球)	S. 22	32	教 師	7人きょうだいの末っ子	貧 困	卓球一家、両親の苦勞→心の支え	物心ついた時から
26. ゴーマン・美智子 (マラソン)	S. 10	43	医 者	第2人の長女 19才の時 父死亡	貧 困	父の死後、苦勞・渡米	33才、夫のすすめ
27. 田口 信教 (水 泳)	S. 26	28					小学生の時、スイミングクラブ
28. 沢松 和子 (テニス)	S. 26	28				父の英才教育、姉の影響	物心ついた時、父の指導
29. 千葉 仁 (剣 道)	S. 19	35	農 業	8人きょうだいの5番目	貧 困	貧乏が精神的支え	中1、小さい時から夢
30. 渡辺 長武 (レスリング)	S. 15	38				スポーツ好きの家族	高1、従兄のすすめ
31. 若林 仁 (アイスホッケー)	S. 18	36		8人兄弟の4番目	苦 勞	貧乏→ナニタツという気持	4才、町ぐるみスケートの環境
32. 笠谷 幸生 (ジャンプ)	S. 18	36				兄の影響	4・5才、なんとなく遊びから
33. 坂田 好弘 (ラグビー)	S. 17	37		4人兄弟の末っ子			高1、先輩のすすめ

(※) 『体協時報』掲載時の年齢

わけではない。

研究方法は前述した見田の「質的データ」分析の方法を採用する。

「戦略データ」として、『体協時報』⁽³³⁾連載の「名選手は語る」の33名の一流競技者の記述を用いた。対象とした33名、および、彼らの属性・生育環境等は「表-1」に示すとおりである。尚、本調査では時間的制約や統一性確保のため、「名選手は語る」の記述のみをデータとし、何らの補充調査も行っていない。従って、編集や印刷時におけるミスの可能性、当然記述されるべき彼らの属性における不明箇所、また、質的データの欠陥でもあるが基準や記述の不統一等の不備・欠陥を前提としている。しかし、これらの不備・欠陥も第一のミスの可能性を除いては、語られていないこと（不明箇所）

は彼らの主張に対しあまり重大な影響を与えていないことの結果ともみなされうるし、不統一は生き生きとした具体性の結果であり、質的データとしてはむしろ利点とみなされることでもある。

従って、前述の危惧はあまり大きな問題とはならないが、この資料は「戦略データ」として、次のような一面性や欠陥を持っている。

- a) 「名選手は語る」の33名の代表性の問題；この33名は日本の代表的な一流選手ではあるが、その一部であり、彼らが一流競技者すべてを代弁しているわけではない。また、「表-1」にみられるように種目に片寄りがあったり、どの種目をもカバレッジしているわけではない。
- b) 二重の意味で間接的であること；この記

述は本人自身の、しかも、スポーツ観についての記述ではなく、編集者のインタビューに答えたものであり、他人（編集者）によって編集されたものである。それ故、記述の内容は33名統一されたテーマで語られたものではなく、インタビュアーの意図や会話の流れによって欠落しているものが多くあること。さらに、紙面の都合その他の理由から、編集者の意図によって内容の短縮や歪曲の可能性が多分にあることが考えられる。

このようなデータ固有の限界を認識し、この調査から短絡的早急な結論付けをすることは極力避けなければならないだろう。

2. 一流競技者のスポーツ観とスポーツ観構造

(1) 一流競技者のスポーツ観構造

一流競技者のスポーツ観を構成するいくつかの信念や価値志向を明確にするため、つまり、スポーツ観の構造を明らかにするために、33名の記述の中から様々なスポーツに関する認知的側面を抽出する必要がある。

分析のための単位を文章とし、33のサンプルから、約500のスポーツに関する現在の意見や態度・信念を表明する文章が抽出された。これらの文章は、相互に関係を持ち、また、明確には分類しがたいが、大きく三つの範疇に類型化しうる。すなわち、(A)スポーツそのものの在り方やスポーツを行なうことの意味などの信念を中心とするもの、(B)勝つため、強くなるための方法や手段、選手養成策などの信念を中心とするもの、(C)その他、である。ここでは(A)を「存在論的スポーツ観」、(B)を「方法論的スポーツ観」と呼ぶことにする。これらの信念や価値志向の項目群は面接者の誘導によるものが大部分であると思われるが、一流競技者に期待される役割に関連した項目であり、一流競技者あるいは競技スポーツに特徴的なスポーツ観を構成し

たものであると考えられる。

この(A)(B)2つの大きなクラスターは、さらに内部で相互に密接な関係を持った下位信念群によって体系化されている。(C)「その他」からは特に関連する「日本人観・日本人のスポーツ観」と「外国選手観」の2項目が選択された。(A)(B)(C)それぞれの下位項目は次の様に分類しうる。

(A) 存在論的スポーツ観

(1) スポーツの存在観

(1.a) スポーツの人生や生活にしめる位置づけに関する価値志向

(1.b) スポーツの類型化に対する意見

(2) スポーツ行動観

(2.a) スポーツをする動機や目的に関して

(2.b) スポーツをする価値について

(2.c) スポーツにおける勝敗や記録追求の意味について

(3) スポーツマン観

(スポーツマンのあり方、倫理観)

(4) 個別スポーツ観

(個別スポーツ種目の特性について)

(5) プレイ観

(スポーツをする面白さについて)

(6) 技術観

(7) 勝敗観

(勝敗の結果に対する評価について)

(8) スポーツ効用観

(スポーツの道具的価値について)

(9) アマチュアリズム観

(B) 方法論的スポーツ観

(10) 個人的方法観

(10.a) 勝つため、強くなるための個人的な手段・資質について

(10.b) スポーツにとって大切なものについて

(10.c) 個別スポーツ種目で要求されるものについて

- (11) 練習観・鍛練観
- (12) 根性観
- (13) スポーツ教育観
(子育て観も含む)
- (14) 選手養成・強化策観
- (15) コーチ観
- (16) スポーツ行政観
- (17) 生活環境・競技環境観

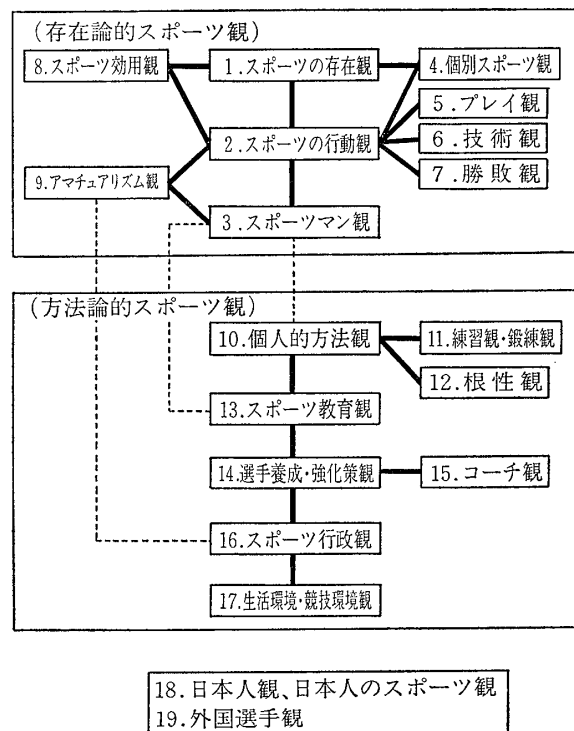
(c) その他

- (18) 日本人観・日本人のスポーツ観
- (19) 外国選手観

これら19の下位信念項目は33名の一流競技者全体から抽出された項目である。それ故、33名全員がこれらについて表明しているわけではなく、一人一人では1項目（兵藤）からせいぜい10項目程度である。また、ほとんどの競技者がそれについて語っている項目（10）から数人によって表明されてる項目（6，7）まで多様である。従って、一流競技者は個人的なスポーツ観としてこれら19の下位信念群を持っているとか、あるいは、19項目の信念が同比重のウエイト（価値づけ）を持っているという断定はできない。この一流競技者のスポーツ観構造は33名のサンプルから抽出された構造モデルであり、総体として一流競技者はこれらの項目に関心と信念・価値観を持ち、また逆に、彼のスポーツ界でしめる地位と役割から社会的に期待されている信念項目であると言うことができる。

これら19の下位信念群は【図一1】のように相互に関係し合って、一流競技者のスポーツ観を構成している。

「存在論的スポーツ観」は、(1)「スポーツ」という文化形態、(3)それを行なう「人間」、および、(2)そこで展開される「スポーツ行動」、というスポーツを形成する基本的な三つの構造要素に関する信念が中心となり、それらに付随したいくつかの信念項目から形成されている。この中で、(2)「スポーツ行動観」は「存在論的スポーツ観」の中心的な位置をしめるが、(2, a)



【図一1】 一流競技者のスポーツ観構造モデル

「スポーツを行なう動機や目的」に関しての信念は前述のスポーツ観の「駆動的側面」を具体化したものであり、(2, b)「スポーツをなす価値」に関する表明がその「規制的側面」を具体化していると思われる。そして、それらはさらに「駆動的側面」が(5)プレイ観、(6)技術観、(7)勝敗観と、「規制的側面」が(8)スポーツ効用観、(9)アマチュアリズム観と関連している。

「方法論的スポーツ観」は、「勝つため・強くなるため」というスポーツ、特に競技スポーツで第一に要請されるテーマに関する態度や信念から構成されている。その方法や手段は、(10)個人のレベルから、(13)スポーツ教育、(14)選手養成や強化策、(16)スポーツ行政、まで多次元で考えることができる。そして、(10)個人的な方法で最も重視されるのが、練習と選手の意志や精神力であり、それぞれについての信念や価値観が(11)と(12)である。(12)「根性」に関しては、わが国の場合、東京オリンピック前後から盛んに話題となり（しばしば否定的評価のニュアンスを持つ）、また、日本のスポーツ観の特徴の一つ（根性主義）とも言われてきたが、本調査のサンプ

ルでも面接者の意図的な質問項目であったようでもある。これに関する表明は「根性」を積極的に肯定する者と、この言葉の持つ日本の歴史的背景を考慮してか、「根性」という言葉を極力避け、他の用語に代替し、それらは必要なことであるとする両者に分かれる。詳細は後に譲るが、カナダで育った若林が「根性という言葉は好きです。スポーツでは絶対に必要なこと」と後めたさもなく積極的に肯定しているのは皮肉的であると言える。

この「存在論的スポーツ観」や「方法論的スポーツ観」を構成する諸項目についての信念は、後にいくつか考察するように、競技者によって、若干の程度の違いや全く矛盾するものまでみられる。その差を生み出した原因や要因は様々であろうが、ここに個別的なスポーツ観研究の重要性が指摘される。しかしまた、一人一人のスポーツ観をみれば、スポーツ観の性格の中で指摘したように、それぞれの項目間でその信念は矛盾なく展開されており、個人的スポーツ観は整序された体系を成していることがわかる。

(2) 一流競技者のスポーツ観の特徴

本調査は、スポーツ観やそれを構成する諸信念・価値志向の統計的処理を行なうことを目的とはしていないし、「質的データ」ではそれを完全な形で行なうことはできない。しかし、33名の一流競技者の全体的傾向と、そこにみられる相違の背景や原因の示唆を得るため、従来日本人のスポーツ観として指摘されてきたことを中心に、その特徴をいくつか考察する。その際、考察の資料はあくまで33名の記述を中心としたため、その歴史的文化的背景の考察は行っていない。

〔スポーツの在り方について〕

スポーツの人生や生活にしめる位置づけに関し、従来、日本人は一流選手になればなる程、生活全体がスポーツになっていると指摘されてきた。批判的意味の込められた「スポーツ馬

鹿」「スポーツ土方」が伝統的あるいは一流の日本人スポーツマンの特徴であった。市村はその原因を武士道と芸道の流れに見い出し、「生活全部をそれにかけてしまうというのが、日本人がスポーツをやる場合の理想であるという伝統的な考え方がある」⁽³⁴⁾と指摘している。

本調査のサンプル(1.a)で「スポーツだけが人生ではない」という生活の多面的価値観を明白に表明している者は3名(古橋・加藤・若林)で、猪谷を加え、彼らは「スポーツと勉強は両立しうる」と指摘している。さらに「スポーツ土方やスポーツ馬鹿(では困る)」(小野)や「スポーツは余暇にやるべき」(君原)という信念も同様の価値志向を表わし、彼らはいわゆる日本の伝統的なスポーツの在り方に批判的である。

これとは逆に、「スポーツと勉強(や仕事)は両立しない」(長久保・加茂)、「スポーツに打ち込むとは日常生活全体を捧げること」(竹本)という信念は、明らかに前者と対立的な信念である。さらに、市村が指摘する武士道や芸道との関わりでは、「剣道は人間の生き方、そのもの」(千葉)、「スポーツも芸術と同じ」(笹原)、「体操は芸の道だ」(竹本)と3名が指摘している。

このように「スポーツの在り方」に関しては、その述べられた信念だけからみる限り、互いに矛盾する二つの立場がみられる。しかし、この項目に関し明白な意見や信念を表明していない競技者も含め、彼らの学生時代・選手時代の競技生活をみると、ほとんどの者がスポーツ一筋に打ち込んでいる。たとえば、「全生活をレスリングに捧げた」(笹原)、「いつも考えることはウエイトリフティングのことだけだった」(三宅)、「生活即卓球なんです」(松崎・長谷川)、「グラウンドに行く定期券はあったが、学校へいく定期はないくらいでした」(坂田)など。そして、彼らはこうした体験から、勝つため強くなるためには長時間の練習しかないという信念⁽¹⁰⁾を持ち、それに対する明らかな反対意見を表明しているのは加藤・釜本・若林・笹谷・坂

田の5名だけである。

生活すべてをスポーツに捧げることと長時間の練習は必ずしも一致することではないが、この33名の結果から、市村の指摘する生活即スポーツという日本の特質は全体として妥当性を持つと考えられる。しかし、問題は彼らは何故、いわゆる「日本的スポーツの在り方」に肯定または否定の価値観を持ったのかである。長時間練習に反対する5名は練習の集中性のために反対するのであって、必ずしも「他にすべきことがある」からではない。「スポーツだけが人生ではない」と表明する6名も、その価値観の背後に様々な背景が考えられる。それらはおそらく、競技者の性格とスポーツを含めた様々な経験によって形成された一般的価値観・人生観に基づいていると思われる。たとえば、猪谷や若林は外国での生活とそこでのスポーツ観に、君原は後に考察するように、自己矛盾の中での競技生活という体験に強く影響されているとも考えられる。また、古橋・小野はスポーツ界で現在果している彼らの指導的立場という要因も見逃すことはできないだろう。このようなスポーツ観の詳細な違いは、その形成過程およびスポーツ種目の特性を分析・比較して初めて明らかにされるであろう。

〔勝利主義について〕

日本人のスポーツ観の勝利主義・勝利第一主義は多くの論者の指摘するところであり、しかも、それは戦争や武士道の勝敗観の影響によって、「勝たずば生きて帰らじ」的なきびしいスポーツ観、娯楽性の欠如したスポーツ観として特徴づけられている。

この価値観は本研究のスポーツ観の構造モデルでは、(2)スポーツ行動観、(5)プレイ観、(7)勝敗観、および(18)(19)などから考察される。スポーツ選手、特に一流競技者が勝利を希求するのは当然であり、その希求の度合が日本人の方が強いとは断定できない。「外人はオリンピックに金も生活もかかっているから気合の入れようが違うし、死にものぐるいでやっています」(鈴

木)、「外国人はみんないい根性しています」(渡辺)という具合に、この傾向は同じである。

問題は勝利追求の質の違いで、前畑がベルリンオリンピック出発の際、大きな期待と責任感に圧倒され、「もう日本なんかには帰って来るもんか」と無意識に叫び、優勝後「これで日本へ帰れる」と安堵した状況に象徴される勝利追求の意味である。日本人のスポーツ観の特徴の一つとして指摘される「勝利主義」もこのような意味での「勝利主義」であるが、岸野⁽³⁵⁾や阿部⁽³⁶⁾も指摘するように、このような極端な精神状態は今の競技者自身にはほとんどみられない。33名の中で「チーム(と自分自身)のためにやる」(生井・釜本)を除いて「……のためにやる(暗に日本のため)」という意見は2名(三宅・竹本)にみられるだけである。ほとんどは「自分のためにやる」「勝ちたいと思うのは、愛国心のためではない」(竹宇治)「スポーツは結局は自己満足」(田口)という信念を持っている。しかし、「日本人は周りの人が勝て勝ていいすぎます」(湯木)「外国人にも愛国心はあります。しかし、負けたからといって、国家的には別にどうということはない。周囲からの圧迫感が違う」(加茂)と指摘されるように、選手の問題というより、日本人の勝利主義は、作田が指摘するように、周囲にその原因があるようだ。選手個人としては、多くの競技者が競争欲求の動機・目的およびその結果の評価を、自分自身の範囲内で処理したいと願っているのではないか。一流競技者としての社会的期待が多くの人にとって心理的重圧となっており、本来「私」の論理の適用されるべきスポーツで、殊更「自分のためにやる」と弁明せざるを得ない状況になっているのである。

「勝利主義」と関連する「スポーツ行動の意味づけ」(2.c)に関しては、「結果本位」か「過程本位」かという二分法的な見方からすれば、本調査のサンプルは明確な表明が、「勝たなくては意味がない」3名、「プロセスが大切」5、6名と標本数が少なく一般化できない。しか

し、このスポーツ行動の意味づけは(7)「勝敗観」と密接に関係している。「結果本位」の勝敗観は「勝つことは個人の名誉だけではない（バレーの普及に機能する）」(猫田)、「勝つことは自分の成果がでること、負けることは成果なしということで2位でもビリでも同じ」(鈴木)という具合に、勝利を他の何かの為の手段として位置づけるか(本調査では前述2名(三宅・竹本)だけではあるが、スポーツのナショナルリズムの機能もここに含まれる)、全か無かというきびしい精神主義的な態度をとる。一方、「過程本位」の勝敗観は、「勝敗は運」(君原・田口)であり、「選手自身としてはやるだけやったという満足感があれば、よしんば負けてもいい」(遠藤)という牧歌的な態度をとるのである。あるいはまた、「本当のものは普段のケイコにある」(千葉)とする剣道では、勝利は単なる一つの目標としてのみ存在し、芸術的な要素を持つジャンプでは、「結果として順位がつき…勝った負けたが超越できる」(笠谷)という非常に交友的要素を高く評価している。

以上のように、日本人のスポーツ観の特性の一つとして常に指摘される「勝利主義」は、33名のサンプルでは、勝利を追求する気持や意志・態度は非常に強く、またそれがスポーツには必要であると大部分の者が指摘しているが、結果に対する悲愴な責任感や使命感はそれ程みられず、ほとんどの者が個人の問題とする信念を持っている。しかし、選手時代のこの悲愴感はかなり競技者にみられ、彼らに勝利を希求する外部の顕在的潜在的圧力は非常に強いことがわかる。また、スポーツに対する「結果本位」「過程本位」という価値志向は、スポーツ社会学国際調査委員会等の統計的データにみられるように、個人的に相違がみられ、個人的なスポーツ体験やスポーツ種目の特性などにその要因を探ることが可能である。

〔自虐主義・精神主義・集団主義などについて〕

日本人のスポーツ観を象徴する現象として、

今でも引用されるのが、かつての日紡貝塚チームの根性主義と自虐主義、また、大学運動部などでみられたシゴキである。これらの現象の背景となった精神構造を探るため、スポーツ観の(10)個人的方法観、(11)練習観・鍛練観、(12)根性観、および、(5)プレイ観を簡単に考察する。

勝つため強くなるための個人的な方法については、33名の約半数が一にも二にも練習であることを指摘し、次に様々な言葉で語られている精神的な強さがあげられている。これは予想しうることであり、しかも、ハードな練習は強い意志・精神力に支えられたものであり(しばしば「ハングリー精神」と呼ばれる)、逆に「精神力は練習に次ぐ練習によって固まってくる」(三宅)と言われるように、両者はほとんど不可分のものである。その際、一流競技者は練習や鍛練をどのように捉えているかが問題となる。

33名のサンプルの中には、佐伯等⁽³⁷⁾の指摘するシゴキの誘因、すなわち、小児的性格や近代的自我の目覚めのなさ、忍従などを象徴したり指摘するトレーニング観がいくつかみられる。たとえば、「剣道は人間の生き方そのもの」(千葉)と指摘される「しつけ」の要素を含む剣道観はもとより、「苦しむのが練習、苦しくなって以後が練習」(君原)、「いい悪いを考えるより、まずやらなくてはならない、それがトレーニング」(鈴木)、「苦しいとか苦しくないという問題ではない」(千葉)という精神主義的・マゾ的態度が表明されている。また、強くなるためには「下積みの時代にあきらめるか耐えるか」(笹原)、「辛抱強さと耐える気持」(竹本)の忍従が要求されているのである。そして、このような苦しい鍛練が逆説的にスポーツの楽しさ、面白さに転化されている。

スポーツの面白さは彼らにとって、「体を鍛える面白さ」(笹原)であり、「苦しみの中から楽しみが出てくる」(神永)、「苦しさの中から楽しさを見出す」(山中)ものとなっている。そして、おそらく、ほとんどの競技者が「つらさに耐えることが平気になる」(長久保)という心理状態になっているのではないだろうか。

しかし、このような楽しさ、面白さはスポーツ本来の欲求から出た楽しさではなく異質なものと言える。これは、社会的な期待の中で自虐的な要素に自己を正当化する手段としての楽しさと捉えることができよう。それ故、「外国人は楽しむためスポーツをやるという考えが徹底している」（坂田）や「たのしむというふんいきではありませんから、結婚してまでやるのはしんどい」（湯木）という諸外国との相違が生まれてくるのである。そして、「もう一度生まれてやれといわれても、射撃だけはやる気になれません」（吉川）、「やるかどうかわからない」（笠谷）という現在の心情や「これからは楽しみのバレーをやります」（猫田）「スポーツは楽しみでやるのがいちばんですね」（神永）という態度が予想以上に多くみられる。このことは、日本の一流競技者の場合、彼らの置かれている地位と役割に期待される特殊なスポーツ情況のため、ある者にとってスポーツは一過性の性質を持つものであったり、私的にゲームを楽しむものではなくなっている。小野が、スポーツを老若男女が楽しむ外国の情況に刺激され、国民スポーツを強く提唱するのも、この日本的スポーツ情況のアンチテーゼからなのである。

「集団主義」に関しては、古橋の「日本人は集団でしか動けないから、一人になると心細くなって、すっかり気弱になる」という指摘はあるが、33名のサンプルの中には、それに対立する信念が数多くみられる。スポーツあるいはスポーツマンには「個性」が必要であると多くの者が指摘し、また「反抗心」や「自分自身で考えること」が大切であるという信念も多い。このことは、この33名の中にはチームゲームの競技者が4名と少ないことも考えられるが、一流競技者たるゆえんは個性的な技術とパーソナリティを持つことでもあり、一流競技者、特に本サンプルの33名に対しては、いわゆる「集団主義」は該当しないように思われる。

「根性観」(12)については、前にも触れたが、「根性」を積極的に支持する者と、その言葉の持つ言外の意味を考慮してか、さりげなく認め

る者、拒否反応を示し他の言葉に代える者に分かれる。彼らの相違は「根性」に対する彼らの定義づけの違いから生じている。多くの者が「根性」を、「意志」（古橋）や「やる気」（渡辺）、「ガッツ」（猪谷・若林）、「反骨精神」（神永）などの、選手の内面的な強さであるとしている。そして、渡辺・若林は「根性」をそのようなものとして歓迎している。しかし、古橋や竹宇治・生井・鈴木などは、そこに「俺についてこい」式の強制的なニュアンスを持たせ、「根性」という言葉に対し否定的な態度をとっている。たとえば、「根性とか教育とか、努力とかいう言葉はあまり好きではない。人に強制しているみたいだから」（古橋）や「根性という言葉よりも努力という言葉が好き」、「根性という言葉もきらいです。気力という言葉が好き」（鈴木）といった態度がみられる。一方、強制的であるかどうかは別として、「根性」という言葉のこの人間関係を評価し、「私は根性という言葉が好きですね。根性とは人の愛情を感じとって素直にがんばる気持……根性とは人と人との信頼関係から出てくるもの」（千葉）と積極的に評価する態度・信念もみられる。

結局、「根性観」の違いは実体ではなく、言葉の解釈の違いであり、千葉を除くと、精神的な強さという解釈に共通性がみられる。それ故、いわゆる「根性主義」といわれる根性・精神力第一主義の問題は、前述の練習観・鍛練観、プレイ観の問題として帰結すると思われる。

以上、若干の問題について、従来から指摘されてきた日本人のスポーツ観、あるいは、スポーツ気質を、本調査のサンプルの中で検証した。しかし、どの問題に関しても、極端な反対の立場をとらない場合でも、競技者の個人的な違い、信念の意味的相違が明らかであった。また、従来指摘されてきた特徴は、競技者に該当するのか、指導者か、あるいは、彼らに期待する周囲の人々なのか、さらに、それらはすべての種目で該当するのか。これら仔細な違いが課

題として残る。このような詳細な問題は、今後の統計的・質的研究——多段式の分析——を待たねばならないだろう。

3. スポーツ観形成過程の構造分析

前節では、日本の一流競技者のスポーツ観を共時的な横のパースペクティブで検討したが、個人的な相違を明らかにするためには、縦の経時的視座が必要である。その経時的考察の中で、スポーツ観形成に働く諸要因が、微細な所ではすべて個人的に相違すると思われるが、大きな影響を与えた因子が見い出され、それらの連関に構造的ないくつかのパターンが存在するならば、それらは個人的な特徴であるばかりでなく、日本の一流競技者のスポーツ観形成過程として一般化しうる。

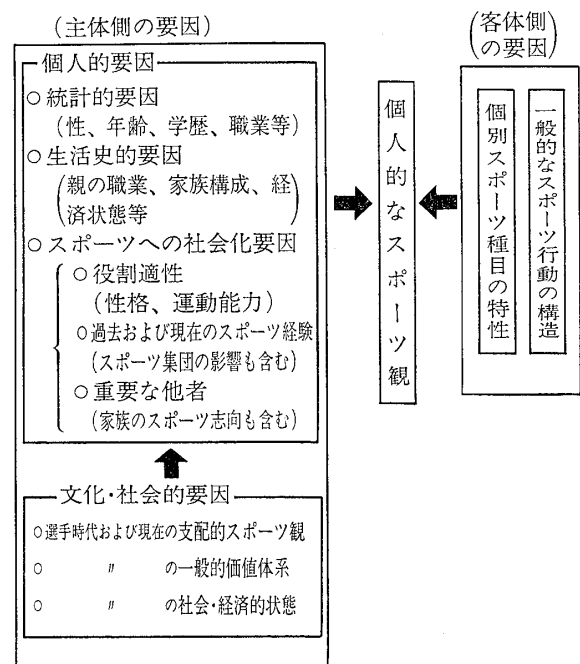
(1) 分析の枠組

このアプローチのための分析枠組は、「スポーツへの社会化」モデルから示唆を得ることができる。スポーツへの社会化とは「所与の社会的文化的背景のもとで、特定の役割適性を持つ個人が、さまざまな準拠集団（家族・学校・地域社会・同輩集団）における重要な他者（家族成員・教師・友人等）による動機づけや強化によって、特定のスポーツ上の役割を取得すること」⁽³⁸⁾とされている。Kenyon⁽³⁹⁾によって開発されたこの因果モデルは、ここ数年様々な分野で検証されてきたが、この方法論の研究主題あるいは従属変数は、すべて「スポーツ参与」「スポーツ実施」に限定されてきた。しかし、「スポーツへの社会化」モデルは「スポーツ参与」を規定する要因分析の方法だけに留まらず、若干の修正を加えるならば「スポーツ観」形成過程の要因分析をも可能とするであろう。なぜなら、スポーツに対する様々な信念や価値観（個人的スポーツ観）は、社会の一般的価値体系や支配的スポーツ観と同時に、「スポーツ参与」（スポーツ経験）と平行に形成されると考えられるからである。

小椋⁽⁴⁰⁾は、勝利志向的価値意識に及ぼす要

因群として、「スポーツ要因」（スポーツ種目、コーチ、組織化の程度、スポーツの腕前など）と「環境（社会）的要因」の二つを考えている。しかし、彼らの考察はそれぞれの項目と価値志向との相関を統計的に分析したもので、スポーツ観形成の要因のためには、これらだけでは不十分である。また、「スポーツ要因」としてあげられている項目は、客体側の要因（スポーツ種目）と主体側の要因（その他の項目）に分けられるべきであり、主体側の要因を「スポーツへの社会化」モデルへ組み込む必要がある。

スポーツ観は前節で分析したように、スポーツ種目によってかなり相違したものとなる。それ故、本研究での分析枠組では、まず、大きな要因群として、「主体側の要因」と「客体側の要因」の二つに分けることができる。さらに、「主体側の要因」は「個人的要因」と「文化・社会的要因」に、「客体側の要因」は「一般的なスポーツ行動の構造」と「個別スポーツ種目の特性」とに分けられる。従来「スポーツへの社会化」研究の成果を総合し、この枠組に当てはめると、個人的スポーツ観形成過程における諸要因の構造モデルは[図-2]のようになる。



〔図-2〕 スポーツ観形成過程の構造モデル

個人的なスポーツ観を、表明された言明からだけでなく、それらをダイナミックに「意味的」に理解・把握するためには、この構造モデルの諸要因を採求する必要があると思われる。

(2) スポーツ観形成の諸要因とその連関の分析

本調査の33名のサンプルからは、前述の「スポーツ観形成過程における諸要因の構造モデル」に示された諸項目すべてについての満足したデータを得ることはできない。それ故、このデータにもとづく以下のスポーツ観形成の背景の分析は、その一部の考察として位置づけられる。

以下の事例研究は、33名のサンプルの中からスポーツ観や生育環境に違いのみられる競技者数名を選び、そのスポーツ観形成過程を考察したものであるが、彼らは必ずしも一流競技者、あるいは、33名の「質的代表性」を満しうるものではない。本研究の位置づけが、その一部として、モデルの構築とその検証という試論であり、より詳細な分析と考察は今後の課題として残る。

事例1—三宅選手（S.14生，36歳，大学卒，自衛隊体育学校教官）

〔主なスポーツ観〕

- ① スポーツは勝たなくてはダメだよ。親のため、町のため、みんなのため、日本のためがんばる気持ちがほしいね。
- ② スポーツ界にはそんな強い個性が必要なんだ。カドはとらない方がよいと思っている。
- ③ ウェイトリフティングは自己を訓練する手段としては、本当にすばらしいスポーツだね。自己との戦いがこれほどびったりくるものはない。また自分の欲望を、これほどコントロールできるスポーツもない。
- ④ 中途半端なアマチュア規定なんかない方がいい。

- ⑤ どんな人間でも努力すれば、最初はヘタでもいつかは人並みにはやれる。天性は3分，努力が7分だよ。
- ⑥ 世界で勝負していくんだから、並みの鍛練ではダメ。
- ⑦ 競技は力のみにあらず、精神にある。精神は不断の練磨の中に宿る。
- ⑧ 若いうちは、一つのスポーツにきめつけないで、あれこれたくさんやる方がいい。
- ⑨ 選手が国際レベルに達したら、あまり財政的な心配をかけないようにしてほしい。
- ⑩ 東欧では小さい時から家族ぐるみでスポーツをやり、独立心がある。日本人は過保護である。……もう少し青年らしく、自分で体を鍛えるという気持をおろそかにしてほしくないね。

〔要因一連関分析〕

(A) ①の信念は「スポーツ観構造」の中の「スポーツ行動観」および「勝敗観」の側面である。この信念は、(i) オリンピック4回出場中2回，世界選手権4回優勝という彼の輝かしい競技経歴と，そこから生まれた彼の「世界一」の自信と日本の代表としての「プライド」，(ii) 貧困の生活の中からバーベル一本で身を起こし，その間，多数の恩人や後援会の人々に精神的・経済的に援助を受けたこと，に起因している。彼はまた，縁起をかつぎ，神や仏を信じ，節目の正月に旧年の反省と今年一年の計画を立てる，伝統的な日本の生活様式とその精神的背景を持ち合わせている。勝つために縁起をかつぎ神に祈る気持は外国選手にもよくある例だが，彼の場合，その気持が単なる個人的なものではなく，年始や墓参という社会的な形となっている。そして，「感謝・希望・信頼の三つがバーベル人生で得た最も貴重なもの」という信念となり，それが「……のためにがんばる」という伝統的な日本人の勝利追求の目的を形成していると思われる。

(B) ②の信念は前述のように，多くの一流競技者に共通した態度である。その他，彼の場合

には、幼少時からの苦勞（家の手伝い、小学校から高校まで新聞配達・土方のアルバイト）が、他人に依存しない「負けじ魂」や「ナニクソという気持」「トコトンまでやり抜く根性」を形成したこと、また、大学時代のウエイトリフティングとアルバイトだけの「レジャーも青春もない……孤独な生活」が、「頼れるのは自分だけ」という強い信念を持ったことの結果である。

(C) ③の信念はウエイトリフティングという競技特性とそれに打ち込む真摯な精神主義的態度との結果である。ウエイトリフティングは体重制のため節制し、心身の極限状態の中で体を鍛えなければならない。それは球技のような楽しみではなく、自己の能力実現の楽しみに支えられたものであり、③の信念にみられるような自己（精神および肉体）の節制度や鍛練度を如実に反映するバロメーターとして意義づけられる。

(D) ④の「アマチュアリズム観」および⑨の「スポーツ行政観」は関連し、一流競技者の経済的悩みから生じた信念である。また、「スポーツ行政観」と関連し、一流競技者の果した社会的功績に対する、引退後の行政面での何らかのアフターケアを希望する意見もみられる。

(E) ⑤の信念は、ウエイトリフティングの特性が(C)であげたように、スキルというより努力・鍛練に左右されるものであり、彼の努力が「世界一」に開花した結果の信念であろう。この「努力」という信念を支える要素が、⑥⑦の「鍛練観」「精神力観」となっている。

〔関連ケース〕

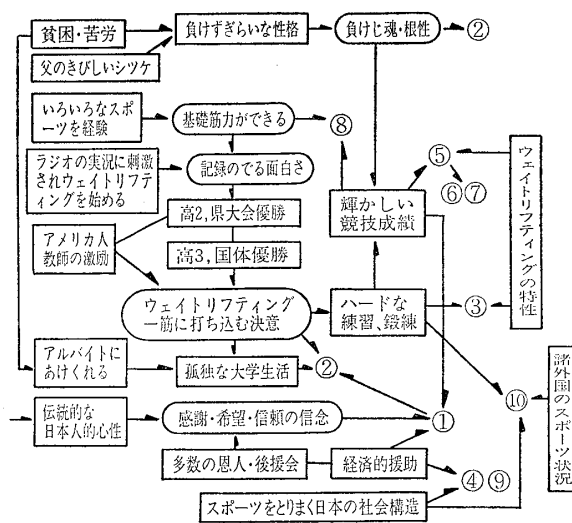
貧乏が「負けじ魂」形成の要因になった、あるいは、精神的支えになったとの指摘は、子どもの頃、経済状態のよくなかった競技者の半数以上にみられる。東京オリンピック前後に活躍した競技者は、戦後のきびしい時代に競技生活や子どもの頃を送り、その苦勞の中から精神的な強さを培ってきた者が多い。そして彼らは「悪い環境はいい環境なんです」（竹本・君原

等）や「貧乏の方が根性も欲も出てきやすいかもしれないが、それは7人についていえることだ。あとの3人は金のある人でもやれる」（三宅）という「環境観」と、⑩にみられるような、現在の若者に対する不満や期待、その役割を果す「スポーツの効用観」を説くパターンがみられる。

「並の鍛練ではダメ」あるいは、自己練磨としてその競技特性を把握する極端な鍛練主義は、体重制限の中で相対的に筋力を多く用いるレスリングに同様の信念傾向がみられる。「レスリングの面白さは……体を鍛える面白さですね。一週間くらい食べなくとも、ねれなくても平気だくらいの鍛練をしておかなくてはね」（笹原）「人間それぞれが持っている体力とか技力というものは、そんなに差はないとぼくは思います。しかし、練習だけは、練習を十分やったという自信、精神的な優越感、そんなものが勝負を決めます」（渡辺）等。従って、「鍛練観」や「精神力観」は競技者の個人的な価値観に左右されるのは当然ではあるが、競技種目の特性によって大きな影響を受けると考えることができる。

一流競技者の功績に対する意見はかなりの者にみられる。このことは、特に東欧諸国における一流競技者のその後の社会的地位と比較した、日本の現状（「用がすめばポイと捨てられた」（三宅・竹宇治））に対する不満と寂寥感から生まれたものであろう。彼らの多くは、「もし、体育省でもあったら、今でも好きなレスリングをやっていたでしょう」（渡辺）という具合に、彼らの経験を生かすような職業や社会的地位を望む者もかなりいる。彼らの不満や願望は、日本の一流競技者をとりまく社会的「期待—承認」のアンバランスな社会構造に起因していると言える。

「事例1」にみられるスポーツ観およびその諸要因は、〔図—3〕のような要因連関図で示されるであろう。



〔図-3〕 「事例1」の要因連関図

事例2—君原選手（S.16生，35歳，高校卒，会社員）

〔主なスポーツ観〕

- ① 朝から晩までスポーツだけをやっているのは、アマチュアとして恥ずかしいことです。アマ・スポーツは余暇にやるべきものです。
- ② アマチュア・スポーツは人にみせるものではない。社会的な評価を受けなくてもいいんです。
- ③ 記録をあげるためにスポーツが存在すると思うのは間違い。記録はスポーツを墮落させている。
- ④ スポーツの栄光は順位や記録ではなく、自分の力が100パーセント発揮できたかどうかです。勝てなくても全力をつくせばいいものでしょう。
- ⑤ 勝つことはあくまでも二次的なこと、勝ち負けは運なんです。
- ⑥ アマチュアは人に迷惑をかけてまでやるべきではない。
- ⑦ マラソンは単純なスポーツで面白くない。
- ⑧ 走っていて、本当の生きがいとかよるこびを感じる時は、自分の体を作品と感じた時です。

- ⑨ 実力をつけるためには練習しかない。
- ⑩ マラソンは我慢するスポーツですから、苦しむのが練習、苦しくなって以後が練習なんです。

〔要因—連関分析〕

(A) スポーツ観の①から⑥までは相互に関連を持っている。すなわち、アマチュア・スポーツは、私的なもので、過程が重視されるべきであるという、いわゆる「プレイ論的スポーツ観」である。これは、彼の一流競技者としての役割、つまり、自らの意志に拘わりなく強制的な練習計画に従い、勝つことへ——「間違った方向へ」——「自らも加担」したことへの反省と、社会的期待に対する反発・反感から生じている。言い換えれば、スポーツマンである以前に、一人の人間であり社会人であり、その為の役割を果さねばならない、スポーツはあくまで余暇に行なうべきだという、彼の一般的価値観に基づくものであり、これに反する選手時代の自己矛盾がこの信念を強化したと思われる。その背景には、東京オリンピック後、選手および社会人としての反省から1年間マラソンを休み「死にもものぐるいで」働いた真面目な性格と、スポーツ劣等生だった小学校時代に象徴されるように、「素質はなかった」という謙虚な気持ちと、自らの運動能力の自己認知とが影響していると思われる。

(B) ⑦⑧は「個別スポーツ観」や「プレイ観」を表明したもののだが、マラソンも格技や球技などと違い、敵と相対峙することのない「コンテスト」としてのスポーツであり、スキルや作戦・戦術の要素のあまり入らないスポーツとして捉えられる。また、この種のスポーツの面白さは、三宅のウエイトリフティング同様、自己実現というオートテリックな面白さがある。

(C) ⑨⑩は彼の「個人的方法観」「トレーニング観」を表わしているが、「競技者は少しでも多くのトレーニングをやるべきだ」という彼の競技者としての義務感から生じている。この義務感とは、勝つ為・強くなる為という単なる手

段的な意味だけではなく、スポーツマンの倫理観でもある。「人間は苦しまなくては進歩しない」という態度にみられるように、スポーツマンは常に進歩・向上を目指すべきであるという倫理観である。そして、この苦痛に耐える精神的な忍耐力は、彼の場合も、幼い頃の貧乏と「みじめな気持」が支えとなっていた。

〔関連ケース〕

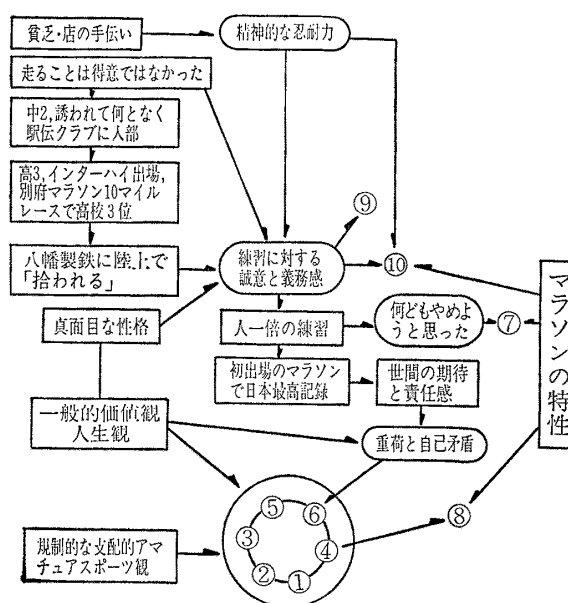
この事例ほど、極端にストイックな「プレイ論的スポーツ観」を持つ競技者は、他のサンプルの中には見当たらない。それは、彼の性格や生い立ち、運動能力、マラソンという競技特性からくるものであろう。しかし、同じように経済的苦労をし、「もともと器用な方ではないし、常に練習の積み重ねでたしかなものを見極め補っていった」遠藤に、「スポーツは十分やってきたかどうか、自信が持てるトレーニングをやったかどうかです」というプロセス重視・トレーニング重視の態度がみられる。

⑧のスポーツの楽しさ面白さは、「一つの完成品をつかって勝負する面白さ」（加藤）と指摘される体操にもみられる。また、「一本一本が芸術作品」（笠谷）のジャンプも同様である。従って、スポーツにおけるオートテリックな面白さである「自己実現」の面白さには、個々の技術の上達（球技や格技）や記録・能力の上達の他に、肉体すべてが自己の意図通りに統制しえ、芸術作品のように感じられる喜びもあるようだ。そして、このような喜びを感じる時、あるいは、この喜びを感じられる競技種目ではしばしば、結果より過程重視のスポーツ観がみられると思われる。

(C)で指摘したような、競技者としての倫理観や使命感で練習や競技を行なう例は、吉川や千葉の職業としての使命感を除いてもいくつか見られる。「やらなくてはならないものなら、それこそ何物をも犠牲にして……徹底してやらなくてはならないと決めていた」（古橋）、「私はとにかく実直といおうか、練習を休むことができないたち」（小野）に代表されるように、好

き嫌い、楽しい苦しいという感情以前の使命感である。また、猪谷や加茂・沢松のような小さい頃からの英才教育で育った者には、当初、「運命」（猪谷）として受け取られている。このような倫理観や使命感は、そこに「楽しさ」や練習に対する「大きな目標」（渡辺）などの目的意識の稀薄な場合によくみられるケースで、近代的自我の目覚めのない、禁欲的・自虐的な日本的トレーニング観であると指摘することもできる。

〔図一4〕は「事例2」の要因連関図である。



〔図一4〕 「事例2」の要因連関図

事例3—加茂選手（S. 7生，45歳，大学卒，会社員）

〔主なスポーツ観〕

- ① スポーツと仕事や勉強は、絶対に両立しません。
- ② テニスをするのは、強くなるためしかない。
- ③ 金をもらっていろいろいまいと、いいものはいんですよ。スポーツだけが、なぜ、アマチュアリズムに厳格なのか、いつも不思議に思っている。

- ④ テニスは実力のスポーツです。テニスでは、ぽっと出てきてすぐ優勝するような人はひとりもない。
- ⑤ スポーツでは個性をのぼすことが大切。
- ⑥ 物事はやろうと思ったら、とことんまで徹底しなくてはものにならない。バカになって、特別に訓練しなくてはものになりません。
- ⑦ テニスに限らず、スポーツではコンセンションが大切。
- ⑧ テニスは英才教育・早期教育が必要。
- ⑨ (スポーツを強くするには) 教育から何から、根本的に発想を転換して、徳川家康が大阪城の外濠りから埋めていったくらい周到な気持で、社会環境から変えていかねばならない。
- ⑩ 日本人は、周りから影響をうけて、責任を感じるが、外国人は、質的に違っている。彼らは個人的な問題として悩むようです。

〔要因一連関分析〕

(A) 彼は有名なテニス一家で育ち、父親の英才教育のもとに一流競技者となった。物心ついた時から、朝は夜明けから、学校から帰ってからは暗くなる迄、一年中休みなしのきびしい訓練が続けられた。それは、父親の影響でもあるが、②「強くなるため」でしかなかった。そして強くなるためには、とことんやらねばならないし、また、そのための環境が必要である。それが⑥や⑦の「トレーニング観」「環境観」となっている。このように、スポーツおよびスポーツで勝つことを単なる余暇活動やプレイとしてではなく、人生や社会生活の大半をしめる目標や課題として積極的に位置づけるならば、当然、①や「監督にしろ、選手にしろ、テニスにかかり切りでなくては勝てません」という「スポーツの存在観」が信念として表明される。また、そのための強化策やスポーツ行政も⑨のように抜本的・徹底したものでなくてはならないだろう。

(B) このような信念や態度は、アマチュアと

いうよりほとんどプロ競技者の態度やあり方であり、それが③の信念となっている。その背景には、アマチュアスポーツ界の中でおそらく最も商業化が進み、競技会もプロとのオープン化が積極的に取入れられている、テニス競技独自の社会的位置づけが考えられる、テニス界ではアマチュアであろうと多額な金銭の授受があり、それが常識的となっている。「表面的にアマなのに、実質はプロというケース」がたくさんあり、そのようなアマチュア規定の矛盾に対する憤りでもある。

(C) テニスに限らないと思われるが、スポーツでは④の信念の意味する地道な努力が必要であり、特にテニスの場合、彼は実践を強調し、そのためにも小さい時からの英才教育・早期教育を主張している⑧。これは、外国選手や彼自身および猪谷・沢松選手の英才教育の成功例から出た信念であろう。また、「目標を定めて、一つのことを貫け」という教育観にみられるように、「あれもこれもやっていて、1つのことがパーフェクトになり得ない」目的と手段を混同するやり方はいけないとする一般的価値観からでもある。

(D) ⑩の日本人および外国選手観は、デ杯7回出場など国際試合の体験から生まれたものである。その背景として彼は、外国選手の場合、「自分なりにトコトンまで修練を積み、一つのことに徹すると、社会的に食っていけるというバックグラウンドがある。つまり、テニスに打ち込むことで生活が保証される環境がある」ことをあげている。このことは、スポーツを行なう目的や勝敗の意味(スポーツ行動観)に関し、よく指摘される外国人の個人主義、日本人の集団主義という二分法ばかりでない、スポーツや競技者をとりまく社会制度の相違の影響を示唆するものとして興味深い。スポーツによる社会移動は日本ではそれ程問題とされないが、外国特にアメリカではその社会学的研究の主要なテーマである。つまりこのことは、日本ではスポーツによって名実ともに社会階梯を昇るには社会的な制約があり、彼のように「もし、外国み

たいに、テニスで食っていけるのなら、ほくもテニスをもう少しやっていたかもしれない」アマチュアが数多くいるであろう。一方、特にテニスの場合には、諸外国の選手がスポーツで「社会的に食っていける」環境にあり、勝敗は自分の生活や将来を左右する問題なのである。この社会制度の相違が、日本人と外国人の「スポーツ行動観」の違いの背景として存在しているのである。

〔関連ケース〕

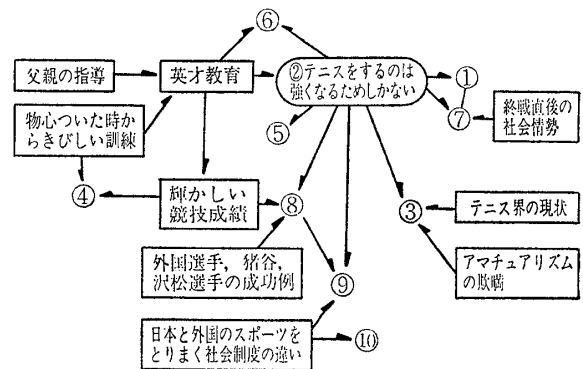
「強くなるため」に「とことんまで徹底して」訓練し、また、そのためには「集中」できる環境や意志が必要である、とする意見や信念はほとんどの競技者に共通してみられる。その中で「集中してできる環境」に関しては、彼のような終戦直後の「他に楽しみがまったくなかった」という社会情勢（古橋・荻村）と、「泳ぐしかやることのないところ」（竹宇治）、「バレーしかやらない町」（猫田）という生育環境（他に山中・鈴木・若林・笠谷等）の二つが考えられる。

父親による英才教育は他に猪谷・沢松の事例があるが、猪谷も「スポーツでは小さい時からツツケが大切で、家族ぐるみでやっているという気持が大切ですね」と英才教育を肯定する意見を述べている。しかし、スポーツ教育や子育てに関する意見を述べている他のほとんどは、早期教育に反対している。その理由は「スポーツしか知らない子どもは育てたくない」（古橋）や「一流になるためにはどんなスポーツでも手がけるべきだ」（鈴木）「人間を枠にはめるからよくない」（坂田）など様々であるが、英才教育を主張する加茂や猪谷も含め、自らの経験や体験を肯定した信念となっている。

「アマチュアリズム観」に関する表明は、33名のサンプルの中で改定を主張する者も、テニスの加茂と沢松を除いて、すべて「ある程度の保証」という限定付きである。沢松は彼と同様、「賞金には何の抵抗も感じませんでした。上手な人がお金をもらう仕組み、技術の上の人

が当然もらうといった感じで、極めて個人的なこと。スポーツだからお金をもらうのはおかしいと騒ぐ方がおかしい」と、極めて現状を肯定した積極的な態度をとっている。また、坂田は「アマチュアリズムが残っているのは、今や世界的にもラグビーぐらいのものですから」として、コマーシャリズムに利用されないことを指摘している。このように、アマチュアリズムや経済的援助に関する態度・信念は、明らかに、それぞれの競技種目の現状や世界的趨勢によって相違するものと言えるであろう。

〔図-5〕は「事例3」の要因連関図である。



〔図-5〕 「事例3」の要因連関図

一流競技者33名のサンプルから3名を選び、制約された記述内容から、彼らのスポーツ観形成過程の要因分析を行なったが、次のような結果や今後の課題が指摘しうる。

(i) 3名のスポーツ観やその要因分析から明らかなように、個人的なスポーツ観は個人によって相違がみられ、たとえ同じ信念内容であっても、その意味的な違いが存在する。

(ii) その違いは〔図-2〕に示した、主体的要因・客体的要因によって生ずる。

(iii) 3名の要因連関図にみられる個々の関係(A→B)は、彼らとの「関連ケース」で指摘されるように、一流競技者において、現実におこりうるものとして確定しうる。

(iv) 今後、より詳細なインテンシブ・イクステンシブな調査・分析によって、これらの現実的に可能な因果連関のパターンを特定化し、

さらに、その枠組を拡大し、いくつかの全体的な構造連関を構成する必要がある。

おわりに

本研究は「日本人のスポーツ観」研究の試論として、方法論の検討と分析モデルの構築および若干のその検証を行なった。しかし、分析の対象者は一部の一流競技者であり、データ上の不備や制約等で、その考察も満足なものではない。今後、さらに詳細な考察が必要とされる。また、本調査の分析の中から示唆された、スポーツ観の社会的・個人的な機能や、単なる個人の次元ではない社会構造や価値体系全体との関係も考察する必要があるだろう。

ところで、スポーツ観研究の必要性が叫ばれながら、概説的な抽象的・演繹的考察が多い中で、本研究で用いたような質的・具体的・意味的な考察は重要な意義を持つものと思われる。竹之下の指摘する「どのようなスポーツ観を育てるか」という教育的配慮のためだけでなく、「了解可能性」や「多次元的把握性」を持つダイナミックな考察は、一面的でない新しい諸要因とそれらの関連性など、質的に深い知識を得ることができるであろう。今後、統計的な調査との補完の中で、客観的に高められた研究が必要と思われる。

注および参考文献

(1) 竹之下休蔵, 菅原禮編, 『体育社会学』, 大修館, 1972, 69頁。

(2) ホーマンズ, G. C., (橋本茂訳), 『社会科学の性質』, 誠信書房, 1981, 11—15頁。

(3) 岸野雄三, 「日本のスポーツと日本人のスポーツ観」, 体育の科学18—1, 12—20頁, 1968。

(4) 菅原 禮, 「日本的スポーツ風土の社会学的考察」, 新体育46—4, 22—25頁, 1976。

(5) 同上

(6) 村上泰亮, 『産業社会の病理』, 中央公論, 1976, 82—99頁。

(7) 見田宗介, 『現代日本の精神構造』, 弘文堂, 1974, 57—71頁。

(8) 「スポーツ信条」とは, H. Edwards の分析した“Sports Creed”の意味で用いる。Edwards, H., *Sociology of Sport*, Dorsey, 1973, pp. 63-69。

(9) 見田宗介, 『価値意識の理論』, 弘文堂, 1974, 1頁。

(10) 鬼頭は「アマチュアリズムとは、一種の道德律である」と指摘している。鬼頭鎮三, 「アマチュアリズムの終焉」, 体育科教育29—11, 19頁, 1981。

(11) 川本信正, 市村操一, 佐伯聰夫, 「日本人のスポーツ気質を語る」, 体育科教育24—1, 5—14頁, 1976。

(12) Edwards, H., 前掲書, p. 64。

(13) 内海和雄, 「スポーツとは何か(上)」, 体育科教育25—1, 40—45頁, 1977。

(14) ジレ, B., 『スポーツの歴史』, 白水社, 1974, 15頁。

(15) Edwards は「アメリカのスポーツ信条」を抽出・分析し、その「道具的側面」と「管理的側面」を次の表のように分類している。

道具的 (目標達成)	管理的 (パターン維持)
Ⅱ. 規律: 社会統制と自制	Ⅰ. 性格: 性格の発達; 忠誠; 愛他主義
Ⅲ. 競争: 不屈の精神; 生活の準備; 社会移動の機会	Ⅵ. 宗教性
Ⅳ. 身体適性	Ⅶ. ナショナリズム
Ⅴ. 精神適性: 臨機応変な精神; 学業成績	

Edwards, H., 前掲書, p. 129.

(16) 木下秀明, 「日本人のスポーツ観」, 体育の科学21—1, 2—6頁, 1971。

(17) 浅田隆夫, 「日本の精神的風土とスポーツの特性」, 新体育46—1, 20—23頁, 1976。

(18) 芳賀健治, 「シャーマニズムと日本の体育文化との関連性に関する視角」, 体育・スポーツ哲学研究3, 41—50頁, 1981。

(19) 作田啓一, 「高校野球の社会学」, 思想の科学30, 8—13頁, 1964。

(20) 近藤英男, 山上仁土, 「スポーツマンシップについての研究」, 体育学研究10—1, 226頁, 1965。

近藤英男, 「スポーツ・モラルについての日本と欧米との比較体育的研究」, 体育の科学22—12, 801—805頁, 1972。

(21) Suetoshi, H., “A Comparative Study of

- Attitude towards Sport between the Japanese and the British”, 体育学研究15—4, 219—229頁, 1971。
- (22) 日本体育協会, 「わが国一流選手の育つ社会的背景」, 昭和53年度体協スポーツ科学研究報告, 1978。
- (23) スポーツ社会学国際調査委員会, 『一流競技者のスポーツへの社会化に関する調査研究報告』, 道と書院, 1981。
- (24) 見田宗介, 前掲書(9), 363頁。
- (25) スポーツ社会学国際調査委員会, 前掲書, 89頁。
- (26) 見田宗介, 前掲書(9), 364頁。
- (27) 同上, 364頁。
- (28) 吉野和子, 村上春夫, 「戦後児童文学に表わされたスポーツおよびスポーツ観の一考察」, 日本体育大学紀要6, 103—119頁, 1977。
- (29) 例えば, 片岡暁夫, 「P. weiss のスポーツ哲学に関する構造分析」, 筑波大学紀要4, 1—9頁, 1981。杉本政繁, 水野忠文, 「ルキアーノスの『アナカルシス』における体育論について」, 体育学研究20—3, 177—184頁, 1975。また, 岸野・成田・山本・稲垣編, 『体育・スポーツ人物思想史』, 不味堂, 1979。における体育史的研究も含まれるであろう。
- (30) Beisser, A., *The Madness in Sport*, New York : Appleton-Century-Crofts, 1966。(藤原健固訳, 『スポーツ心理学』, ベースボールマガジン, 1976.)
- (31) 見田宗介, 前掲書(9), 364頁。
- (32) 同上, 367頁。
- (33) 『体協時報』の「名選手は語る」の連載は, 1975年11月から始まり途中1976年8月1ヶ月休んで, 1977年9月まで22回続いた。さらに, 1979年2月から再開され1979年12月の最終回まで, 都合33回である。
- (34) 川本・市村・佐伯, 前掲書, 11頁。
- (35) 岸野雄三, 前掲書, 15頁。
- (36) 阿部牧郎, 「現代村の運動会」, 新体育46—1, 38—42頁, 1976。
- (37) 川本・市村・佐伯, 前掲書, 11—12頁。
- (38) スポーツ社会学国際調査委員会, 前掲書, 1頁。
- (39) Kenyon, G. S. and B. McPherson, “An Approach To the Study of Sport Socialization”, *International Review of Sport Sociology* 9, pp. 127—39, 1974。
- (40) 小椋 博, 森川貞夫, 枝村亮一, 「スポーツに対する態度, 特に勝利志向の分析」, 体育社会学研究会編『スポーツ参与の社会学』, 道と書院, 1977, 57—68頁。

An Analysis of the Conception of Sport of Top Athletes in Japan

—A pilot study of the sport conception of the Japanese people—

Tomio MARUYAMA

The present research has been carried out concerning, (1) to examine the methods of study on the sport conception, (2) to make clear the structure of the sport conception held by the top athletes in Japan, (3) to find out the factors influenced to the process of forming the sport conception.

(1) The studies on the sport conception were so far done with the following three approaches. (i) An approach based on the study of the national characteristics of the Japanese. (ii) An approach with statistical investigation. (iii) An approach with qualitative data analysis. For the present research the third approach has proved useful for making clear the structure of the sport conception and for finding out the factors which have influenced its forming process.

(2) The sport conception consists of various factors such as attitude, belief, value-orientation towards sport. These factors were sampled from the reports of interviews in "*the Taikyō Jihō*". The top athletes who were interviewed were 33. From these materials the sport conception in top athletes can be said to form the structure as shown in Fig. -1. The subjects on "how sport should be". "Shōrishugi" —winning is the first thing—, "Seisin-shugi"— over emphasis on mental effort—etc. were also examined.

(3) The structural model of the forming process of the sport conception was constructed as shown in Fig. -2. Three men were selected among 33 and their forming processes of the sport conception were analyzed. From the results, factors-relation schemes on the forming processes of their sport conceptions were obtained as shown in Figs. 3-5.